

潮文庫 33

風の中の子供

坪田譲治





潮文庫

風の中の子供

33

(定価はカバーに標示してあります)

昭和46年2月20日発行

著 者 坪 田 譲 治

発行者 池 田 克 哉

発行所 株式 潮出版社
会社

東京都新宿区南元町 14-1 (郵便番号160)

電 話 (357) 7111 (代)

振 替 東 京 6 1 0 9 0

印刷所 図書印刷株式会社

© J. Tsubota 1971 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします



潮文庫—32

風の中の子供

坪田譲治 水藤春夫編

目 次

風の中の子供	五
枝にかかった金輪 かなわ	一三
マタメガネ	一五
村は晩春	一六
柿の甚七 じんしち	一九
キツネ狩り	二二
小川の葦 あし	二三
雪という字	二四
キツネとブドウ	二七
武南倉造 たけなみくらぞう	二五
解説	二五
水藤春夫	二五

風の中の子供

テープやひもを織る工場が村のはずれに立っていた。資本金八万円、織工四十人。それでも組織は株式会社で、明治の時代に建てられ、赤煉瓦れんがの煙突を高くそびやかしていた。

夏のある日、その日、その会社の近くの石橋の上で、三平と金太郎が出あった。三平は一年生、金太郎は二年生。ところで、その時金太郎がニヤニヤわらったのである。三平を馬鹿にしたわらいかたである。

「なんだい。」

三平がとがめた。しかし金太郎はニヤニヤをやめない。

「なんだい。」

三平はけんか腰になる。と、金太郎が顔をつきだしている。

「おまえんとこのおとうさん、こんど会社をやめさされるんだぞう。」

「ウソだあい。」

三平がいう。

「ウソなもんかい。見ててみる、やめさされて、警察につれて行かれるんだ。おまわりさんにくられて、ごめんなさい、ごめんなさい、いいいい引っぱっていかれるんだ。」

「バカッ。」

もう承知できなかった。三平は棒を拾うと、金太郎の頭をたたいた。コッソンと大きな音がした。そこで棒を投げつけて、家のほうへかけだした。十間ばかりでふり返ると、金太郎顔を真赤にして追いかけてくる。とっさに、道の小石を拾いとり、金太郎に投げつけて、また家のほうにかけだした。家に五、六間のところになると、門に兄の善太が立っていた。それを見ると金太郎は追うのをやめた。なにしろ、善太は五年生である。

「どうしたんだい。」

善太が声をかけた。

「だってさ……。」

金太郎が大声で語りはじめた。

「ボク、何もしないのに、三平チャンが棒で頭をぶつんだもん。大きなコブができちゃった。」

金太郎は頭に手をやり、さも痛そうな表情をして見せる。

「ウソだあい。」

三平は左足をまえへだしてかまえている。しかし善太としては、いちおう三平をしかっておか

ねばならぬこの場のありさまだ。

「三平チャン、イタズラしちゃだめだよ。」

「ウソだあい。」

三平はくり返す。

「だって、いま、棒でぶったじゃないか。」

金太郎が一步ふみだした。

「ウソ、ぶった。」

三平は応じる。

「どうしてぶったんだい。」

これには三平困るのである。目をパチクリやるよりしかたがない。でも、三平も一步ふみだしていったのである。

「ぶった。ああ、ぶった。」

このことばと調子のなかに、理由の存することをいいふくめた。それは善太にわかってもらえない。

「だめだよ、三平チャン。」

善太はこんなしかりかたをする。

「だってさ、金チャン、悪いんだもん。」

三平がいうと、すぐ金太郎がアゴをつきだしていつてくる。

「悪いなあ。悪けりやいつてみる。」

これは困った。返答は口いっぱいにみちみちて、ほおさえ熱くなってくる。それでも口の外へ出て来ない。すばやく石を拾いあげ、右手を高くふりあげた。石に返答させるのである。と、善太がまえに立ちはだかり、その右の手をだきかかえる。

「だめだよ。乱暴すんなよ。」

「ウウン、金チャン、悪いんだもん。」

善太の手のなかで、三平は身体をゆすって暴れた。

石を投げようとする三平を、善太がだきとめているそのすきに、金太郎は一步一步後むきに引きあげた。やっと男子の体面を保つことができた。十間ばかりいった時、そこで彼は大声をあげた。

「やあい、三平の馬鹿野郎ッ、おまわりさんにくくられて、ごめん、ごめん、ごめんなさァい。」
節をつけて、腰をかがめ、一踊りして逃げていった。善太と三平はならんでこれを見送った。

三平はまだくやしくて、右手の石をその時いっそうかたくにぎりしめる。橋の上で、金太郎がもう一踊りして見せると、三平はそのほうに五、六歩勢いつけてかけだし、とどきもしない彼にむかって、力いっばい石を投げた。金太郎がいよいよ見えなくなった時、初めて善太にいつて聞かせた。

「金太郎馬鹿なんだよ。」

「どうして馬鹿なんだい。」

「ウン、あいつね……。」

勢いこんだが、この話はどうも少しいきつまる。

「うちのおとうさんが会社をやめさされるって、それから、おまわりさんに引っぱっていかれるって、そんなことないやねえ。」

「そうさあ。」

そういったが、善太にはこれは少し心配である。おかあさんにすぐいわないではおれない気がする。二、三度首を傾けてみて、それから家へかけ入ろうとする。と、三平が聞くのである。

「にいちゃん、どこいくんだい。」

「ウン。」

おかあさんにいつけるといっては、おとなげなくはないだろうか。弱虫ということにならな

いだろうか。善太はいいなおしたのである。

「お茶飲みにくくんじゃないか。」

「ぼくもいこうっと」

ふたりは茶の間へかけこんだ。おかあさんは縫いものをしていらっしやる。善太はやはりいいわなでおれない。

「おかあさん、佐山の金太郎ね、悪いんだよう。ぼくんとこのおとうさん、会社をやめさされて警察へ引っぱっていかれるんだって——」。

おかあさんは顔をあげたが、これを聞くと、返事のことばがでなくなった。おとうさんに不正があるとは考えないが、会社にはながい間紛擾ふんじょうばかりつづいている。株主という株主は腹黒いのばかりである。そのひとりの子どもがこんなことをいうようでは、何が起こるかわからない。悪いたくらみが計画されているに違いない。いままでの暗い事件が次つぎと思い出された。ついボンヤリと考えこんだのである。これを見ると、三平は快活にいいはじめた。

「ウン、おかあさん、大丈夫だよ。ボク、金太郎の頭を棒でたたいてやったんだ。コッソンって、とっても大きな音がしたんだ。コブだってできたらしいよ。あいつ、ウンウンいって、泣くのこらえていたんだよ。こんどいったら、それこそ、ヒドクたたいてやるよ。もっと大きなコブだしてやるよ。ね、おかあさん、そうしたら、あいつ、泣き泣きごめん、ごめんっていうでしょう。」

だから、大丈夫なんだよ。」

「そうかねえ。」

おかあさんは子どもたちに心配させまいと、少し微笑して見せたのである。しかし気がかりで、聞いてみたのである。

「金太郎さん、ほかのことはいわなかった。」

「そうさあ。いったらぼくもつとやってやったんだ。」

三平は大いばりだ。少しすると、彼はこのけんかがおとうさんに知れるのが心配になってきた。

「おかあさん、さっきのけんかおとうさんにいわないでね。金太郎のコブのこともいわないでね。」

「ハイ、ハイ、だけどけんかしちゃいけませんよ。」

「ウウン、けんかしたって、ぼく負けないよ。」

安心した三平はやはり大いばりである。

暑中休暇がやってきた。村には一時に子どもの数が増したように思われた。どこにいても、子どもの声が聞こえてくる。三平はその日、いつものように会社のほうへやってきた。三時の休みが近かった。おとうさんが会社の販売部からお八つを買って帰ってくる時間である。

ところが、どうしたことが、会社の門に子どもがたくさん集まっている。今日は会社の株主総会の日であった。三平のおとうさんを重役から落とす陰謀いんぼうのたくらまれている日であった。金太郎のおとうさんがかわって専務になるという日であった。しかし三平はそんなことは何も知らない。

「おおい。」

と、みんなのほうへかけよった。金太郎もおれば、銀二郎もおり、鶴吉もおれば、亀一もおる。だが、今日それらのなかまがひとりも彼の呼びかけに応じようとしな。聞こえぬふりをしてい

る。

「おい、何やってんだい。」

近よって笑いかけてみる。みんなはだまっている。ウン——三平は考える。——これはこの間の金太郎とけんかしたせいなんだな。で、まず金太郎に声をかける。

「金チャン、おこっているの？」

「ウン。」

金太郎はカブリをふる。

「フーン、じゃ遊ぼうよ。」

「ウン。」

安心して三平はみんなの間へわりこんだ。そこへ羽織を着た村の成人がやったきた。会社のなかへ入っていく。これを見ると、金太郎が大声で呼んだ。

「五ばんッ。」

「六ばんだい。」

銀二郎がいう。

「五ばんですよッ。」

金太郎が主張する。

「五ばん。金チャンのいうとおりだ。」

亀一が金太郎の御機嫌をとる。

みんなは、いま株主総会にやってくる成人の数を数えている。それらが皆三平のおとうさんを重役からおとして、金太郎のおとうさんを専務に推薦するはずである。三平にはそんなことはわからない。わからないので聞いてみる。

「何やってんだい。」

返事するものがひとりもない。とまた成人がやってきた。

「六ばん、七ばん、八ばん。」

金太郎の大声だ。三人は金太郎のほうに笑顔^{えがほ}をむけていうのである。

「ホホウ、門番君、景気よくやってるな。」

なんだ、門番遊びか。三平はわかったような気がしてきた。今日、会社にはお祝いでもあるのかも知れない。自分も景気よくやってみよう。むこうから四人の成人がくるのを見ると、三平はいち早く呼んだのである。

「九ばん、十ばん、十一ばん、十二ばん。」

ところが、笑い笑いやってきた四人のものが、その声で三平のほうをふりむくと、むずかしい顔をしたのである。三平は少し不安になって考える。イタズラがすぎたかしらん。ここにいてはしかられはしないか。しかし勇ましい子ども三平、次にくる人を見ると声をあげた。

「十三、十四、十五ばん。」

こんどのひとりは会社の支配人格、赤沢銃三である。こんどこそはと、三平は彼の笑顔を待ちうけた。しかし彼は金太郎のまえに小腰をかがめた。

「大勢きましたか。」

「十五人だけど、三平君じゃまばかりするの。」

「ほっときなさい。何も知らないんですもの。」

これでは三平だまっておれない。

「知ってらあい。」

「ホウ、そりゃエライ。」

「エライさあ。」

赤沢は苦笑しながら入っていった。これで三平はにわかに元気がでてきた。

会社の門でだいぶ時間がたった時、金太郎がなかからフッフとかけだしてきた。

「オイ、行ってみないか。事務所でけんかやってんだぞう。三平君のおとうさんがみんなと顔を真赤にして議論してらあ。」

それッというので、子どもたちはかけだした。事務所の窓には男女の職工が頭を集めてのぞいていた。異常な総会を一心に耳をならべて聞いていた。子どもらはそこへ頭をつきこんで、猿のように格子に手をかけて登りついた。三平もそれをやってなかをのぞいた。その時、事務室の奥の応接間からドヤドヤと人があふれ出てきた。総会は終わった。口ぐちにガヤガヤいいながら、みんなは門のほうへでていった。工場のなかへ入って行くものもある。職工たちも赤沢銃三が出て来ると、にわかに工場へ引きあげた。

「おとうさん、キャラメル買って。」

金太郎がおとうさんを見つけてあまえている。